仙台市文化財調査報告書第131集

南小泉遺跡

―第15次発掘調査報告―

1989年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第131集

南　小　泉　遺　跡

―第15次発掘調査報告―

１９８９年3月

仙台市教育委員会

序

仙台市内には悠久の原始の時代から近世にまで至る数多くの遺跡が存在し、古くから、この仙台平野には人々が生活をいとなみ、文化を築き上げてきたことが窺われます。とりわけ本報告の南小泉遺跡は古くより調査研究が進められ、東北地方における古墳時代の標式遺跡として知られてきた遺跡であります。とりわけ本市では最大の規模をもっており、全国的にも著名な遺跡であります。しかし、近年の相次ぐ開発事業等に伴って、遺跡のおかれている環境は年々難しくなっていることは否めず、事前の発掘調査による記録保存に努力しているというのが現状であります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承して行くことは私たちに課せられた責務と考えておるところであります。ここに報告する調査成果は、こうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となりますならば幸に存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成元年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　言

1．本書は宅地造成工事に伴う南小泉遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。

3．本書掲載の図１は国土地理院発行の５万分の１「仙台」を複製使用した。

4．本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。

5．本報告の執筆はⅠ・Ⅱを宮崎　明が、Ⅲ～Ⅴを渡部弘美が分担し、編集は渡部が行った。

6．本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調　査　要　項

遺跡名称：南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－102）

所 在 地：仙台市遠見塚二丁目226-1外

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員：試掘調査　渡部弘美　主浜光朗

本 調 査　渡部弘美　宮崎　明

調査期間：試掘調査　昭和63年３月28日～31日

本 調 査　昭和63年４月11日～５月19日

調査対象面積：約8,500m²（発掘面積：約985m²）

調査協力：日本都市開発株式会社　有限会社丸三ビル

調査参加者：小野辰夫　笹川光男　金山幾代　斎藤紀子　大槻明美　渡辺陽子　深瀬嶺子

森ミヨノ

整理参加者：尾形かおり

目　　次

序
例言
調査要項
Ⅰ．はじめに…… 1
1．調査に至る経過…… 1
2．調査の方法と経過…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境…… 1
Ⅲ．発見遺構と出土遺物…… 6
1）住居跡と出土遺物…… 6
2）土坑と出土遺物……15
3）溝跡と出土遺物……16
4）その他……18
Ⅳ.遺物と遺構について ……19
1）遺物について……19
2）遺構について……24
Ⅴ．まとめ……26

図・表・写真目次

図1　周辺の遺跡…… 2
図2　調査地点周辺…… 4
図3　調査区配置…… 4
図4　遺構配置…… 5
図5　Cトレンチ中央部断面…… 6
図6　SI 1住居跡 …… 7
図7　SI 1住居跡出土遺物 …… 8
図8　SI 2住居跡 ……10
図9　SI 2住居跡出土遺物(1) ……11
図10　SI 2住居跡出土遺物(2) ……12
図11　SI 2住居跡出土遺物(3) ……13
図12　SI 3住居跡 ……14
図13　SI 3住居跡出土遺物 ……15
図14　SK 1土坑 ……16
図15　SK 1土坑出土遺物 ……16
図16　各溝跡断面……17
図17　その他の出土遺物……18
表1　周辺遺跡地名…… 3
表2　住居跡出土各土器類構成……22
表3　住居跡観察表……24
写1　調査区全景……29
写2　Cトレンチ基本層位……29

写 3　SI 1 住居跡全景 ……29
写 4　SI 1 住居跡カマド全景 ……30
写 5　SI 1 住居跡土器出土状況 ……30
写 6　SI 1 住居跡カマド下部状況 ……30
写 7　SI 2 住居跡全景 ……31
写 8　SI 2 住居跡遺物出土状況 ……31
写 9　SI 2・SI 3 住居跡全景 ……31
写10　SI 3 住居跡竈出土状況 ……32
写11　SK 1 土坑全景 ……32
写12　SK 1 土坑断面 ……32
写13　SD 1 溝跡全景 ……33
写14　SD 1 溝跡断面 ……33
写15　SD 2 溝跡全景 ……33
写16　SD 4 溝跡全景 ……34
写17　SD 4 溝跡断面 ……34
写18　SD 3・SD 4 溝跡全景 ……34
写19　SI 1 住居跡出土遺物 ……35
写20　SI 3 住居跡出土土器 ……35
写21　出土遺物 1 ……36
写22　出土遺物 2 ……37
写23　出土遺物 3 ……38

I. はじめに

1．調査に至る経過

仙台市東部に位置する南小泉遺跡周辺は、近年来急速に開発が進み、元来田畑であった所が宅地化等によってしだいに減少しつつあり、これらの開発に伴って遺跡が破壊を受ける場面も目立つ地域となってきている。

昭和63年３月31日付けで日本都市開発株式会社・有限会社丸三ビルの二者連名で本遺跡内においての宅地開発に関わる届出が仙台市に提出された。当箇所の東南側400mの地点には遠見塚古墳が位置し、周辺での調査では古代から近世にわたる遺構・遺物が発見されており、当箇所においても同様のものの存在が予想される地点であった。

開発計画では宅地部分は盛り土を行い、道路部分に関して掘削を行うとのことで、調査は地下遺構に影響のある道路部分を主対象とすることにした。尚、当地点は古くより土取り場として使用されていた経緯があり、遺構の存在の有無の点を踏まえ、試掘調査を行い今後の判断材料とすることとした。試掘調査は昭和63年３月28日～31日にかけて実施し、調査区東側のみにおいて多くの遺物が検出された。これらの成果を基にして、調査区東側の道路部分を対象とした本調査を行うことになり、昭和63年４月11日より記録保存を目的とした調査を実施した。

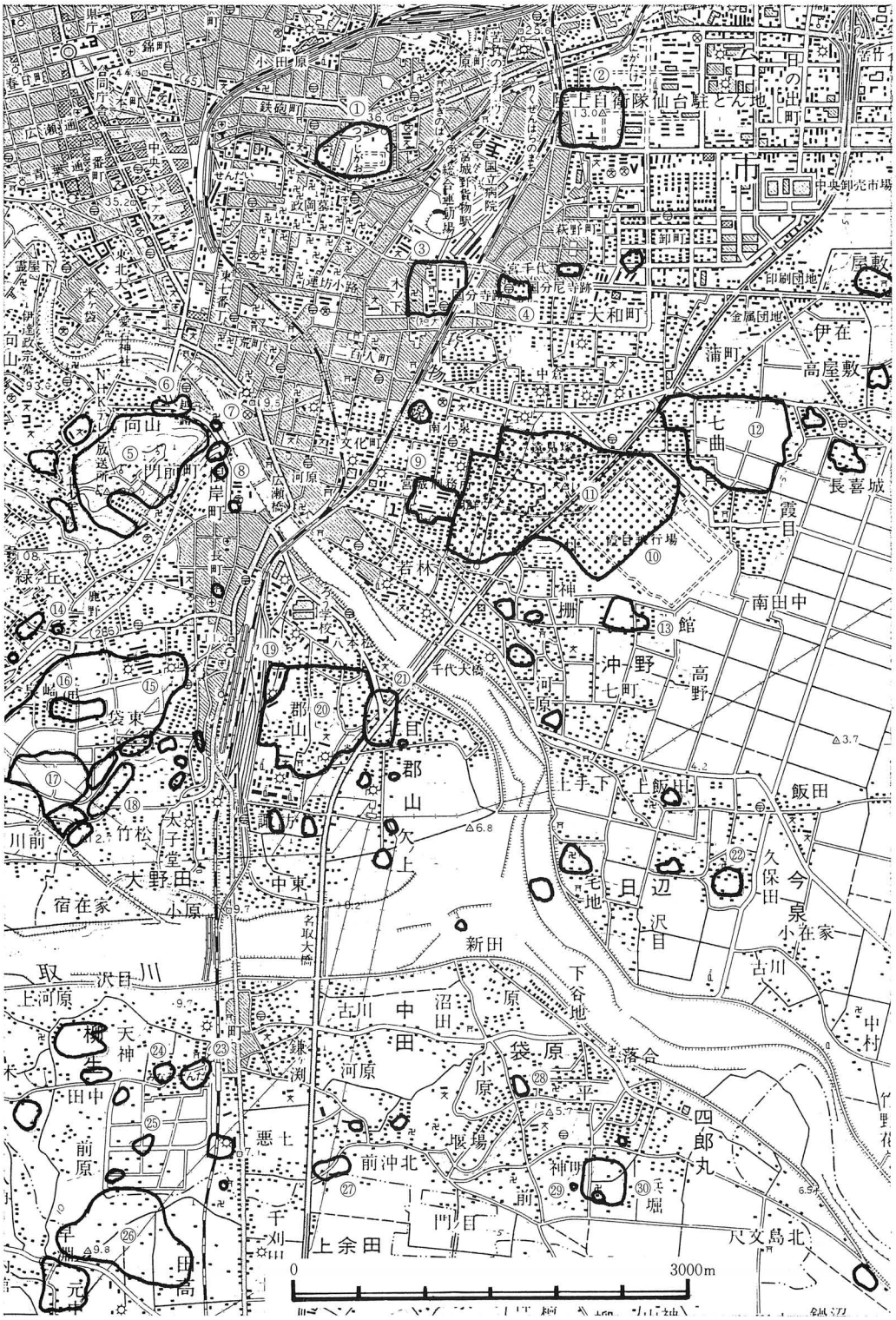
2．調査の方法と経過

調査は１で上述した点から試掘調査から開始している。道路敷部分の中央に約４ｍ幅のトレンチを計６本（トレンチA～F）設定し遺構の有無の確認を行った。当地点は高位に畑地、低位に水田と細かい起伏のある地形となっている。結果としてＡトレンチ以外では遺構・遺物が何ら検出されない状況であったため、本調査区域をＡトレンチの中央部から東側部とすることにした。本調査ではトレンチ南北幅を道路幅である６ｍに拡張し、東西幅70mを計る調査区を設定した。尚、必要に応じて拡張も行っている。本調査では開発地東側の土地境界杭を基準として６ｍを単位とした方眼を組み、東西にアルファベット文字・南北に算用数字を付し、グリッド名としている。

調査は重機で表土層を排除し、人手によって遺構確認を行っていった。検出した遺構には住居跡・土坑・溝跡・性格不明遺構・ピットがある。遺構は調査区全体に散在しているが、住居跡群は東側に偏って検出されている。屋外調査は５月19日に終了した。

II. 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡はJR仙台駅より東南約3.5kmの地点に位置し、仙台市遠見塚・南小泉・古城を



陸上自衛隊仙台駐とん地
中央卸売市場
大和町
伊在
高屋敷
七曲
長喜城
霞目
南田中
館
沖野
七町
高野
河原
若林
神柵
千代大橋
郡山
上手下
上飯田
飯田
日辺
今泉
久保田
小在家
古川
新田
下谷地
中田
沼田
袋原
落合
四郎丸
前沖北
上余田
門目
尺文島北
大野田
宿在家
小原
竹松
太子堂
中東
名取大橋
上河原
天神
田中
前原
悪土
千刈田
田高
0
3000m

図1　周辺の遺跡

中心とした東西約1.5km、南北約1 kmの範囲を有する。遺跡周辺は仙台平野の中央部に位置し付近一帯は広大な沖積地が形成されている。遺跡南方3 kmの地点では広瀬川と名取川の合流点がみられ、両河川周辺には自然堤防・後背湿地が発達し旧河道も観察される。遺跡はこの自然堤防上に立地し、標高は10m前後である。

遺跡が周知されたのは昭和の初めごろで、霞ノ目飛行場拡張工事の際に多くの遺物や住居跡が発見されてからである。弥生土器・土師器・石器などが出土し、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であることが知られ、その後調査で平安・中世・近代の遺構や遺物が発見されるにおよび各時代にまたがる遺跡であることが確認されている。

当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布するが、多くは両河川の自然堤防上に立地している。旧石器時代及び縄文時代の遺構は確認されていないが、弥生時代では広瀬川南岸に西台畑遺跡があり単棺墓・土坑墓が検出されている。他には藤田新田遺跡などもあるが数的には少ない。古墳時代になると遺跡の数も増え、遠見塚古墳を中心とする古墳築造が開始され、猫塚・兜塚・法領塚などの大小の古墳がみられる。また、古墳時代も終末のころ、広瀬川南岸の微高地に郡山遺跡が築造されている。多賀城以前の官衙遺跡で方四丁にわたる柵木列や建物跡が検出されている。奈良時代になると、当遺跡北方約1.5kmの地点に陸奥国分寺・同尼寺が建立される。尚、この地周辺には「二ノ坪」・「三ノ坪」などの地名がみられ、起源に関しては不明であるが真北方向を基準とする条里型土地割も観察される。

番号	遺跡名	種別	立地	時期	番号	遺跡名	種別	立地	時期
1	国分鞭館跡	城館	丘陵	平安	16	泉崎浦遺跡	集落跡	沖積地	縄文・古墳・平安・近世
2	南目城跡	城館	沖積地	中世	17	山口遺跡	集落・水田	沖積地	縄文～中世
3	陸奥国分寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	18	六反田遺跡	集落跡	沖積地	縄文～平安・江戸
4	陸奥国分尼寺跡	寺院	沖積地	奈良・平安	19	西台畑遺跡	包含地	沖積地	弥生・古墳
5	茂ケ崎城跡	城館	丘陵	南北朝～室町	20	郡山遺跡	官衙跡	沖積地	古墳末～奈良初
6	愛宕山横穴群	横穴墓	丘陵	奈良・平安	21	北目城跡	城館	沖積地	室町・江戸
7	宗禅寺横穴群	横穴墓	段丘面	古墳・奈良	22	今泉遺跡	城館・集落	沖積地	縄文～近世
8	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳後期	23	安久東遺跡	集落・古墳	沖積地	弥生～近世
9	若林城跡	城館	沖積地	戦国～江戸	24	安久遺跡	集落跡	沖積地	縄文・古墳・平安・中世
⑩	南小泉遺跡	集落跡	沖積地	弥生～近世	25	栗遺跡	集落跡	沖積地	弥生～平安
11	遠見塚古墳	前方後円墳	沖積地	古墳前期	26	清水遺跡	集落跡	沖積地	弥生～平安
12	仙台東部条里跡	条里	沖積地	平安？	27	後河原遺跡	水田跡	沖積地	奈良・平安
13	沖野城跡	城館	沖積地	中世～近世	28	中田畑中遺跡	集落跡	沖積地	古墳～平安
14	金洗沢古墳	円墳	丘陵端	古墳	29	弁天囲古墳	円墳	沖積地	古墳
15	富沢遺跡	水田跡・包含地	沖積地	旧石器～近世	30	戸ノ内遺跡	周溝墓・集落	沖積地	古墳後期・平安・中世

表1　周辺遺跡地名

図２　調査地点周辺

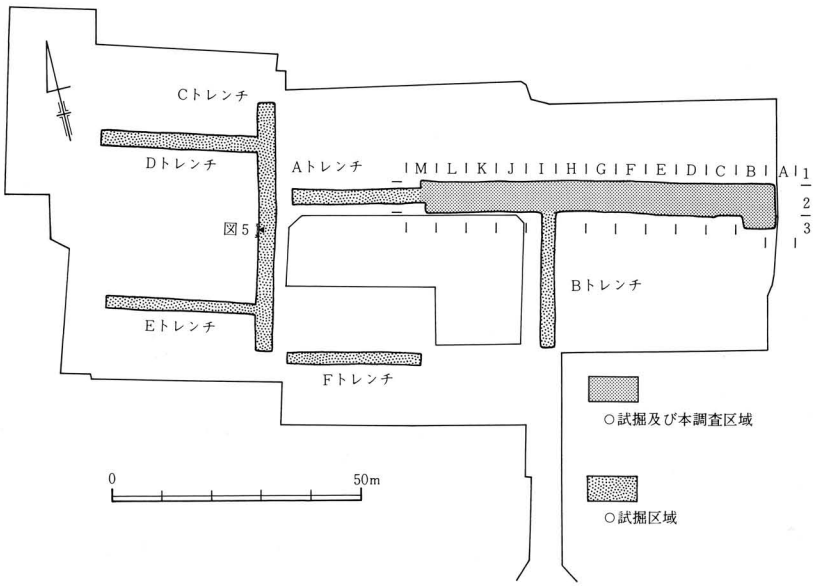


図３　調査区配置

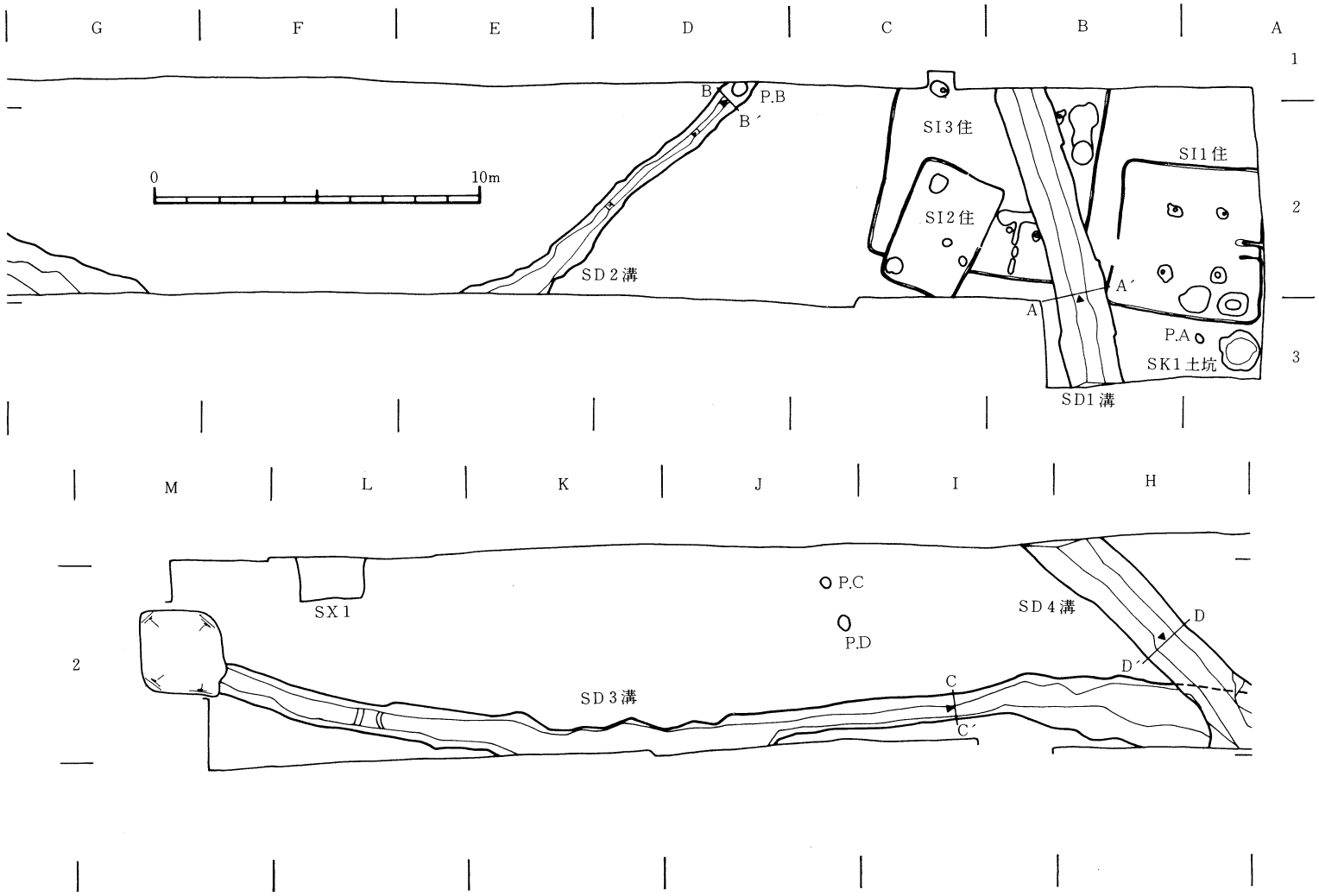
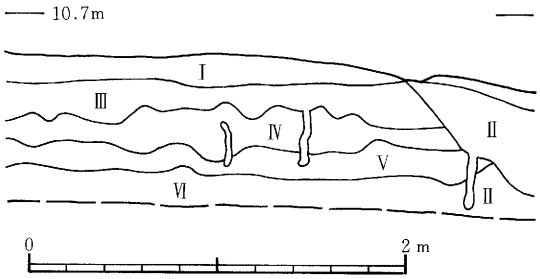

G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
0
10m
B
B´
P.B
SI3住
SI1住
SI2住
SD2溝
A´
A
P.A
SK1土坑
SD1溝
M
L
K
J
I
H
SX1
P.C
P.D
SD4溝
D
D´
C
C´
SD3溝

図4　遺構配置

III. 発見遺構と出土遺物

調査区の現況はIで述べたように水田と畑地で、土取り場としても使用されていた所であった。本調査区の遺構確認面は水田土壌直下であったが、畑地部分は図5の様な状況になっている。VI層が本調査区の遺構確認面に対応するものと考えられ、かなりの高低差がみられる。I～Vの土層は部分的な確認しか出来なかったが、層自体が乱れしまりもあまりないことから客土の可能性がある。調査区周辺一体が削平を受け、畑地部分のみ盛り直しが行われたものと考えられた。VI層より下部の土層は作図しなかったが、黄褐色系のシルト層がみられ、下部へつれて砂質土が混じる。



層位	土	色	土性	備考
I	暗褐色	10YR3/4	シルト	現耕作土
II	黒褐色	10YR3/2	シルト	肩部は崩壊土が混じり,下部は現水田土壌
III	褐色	10YR5/6	シルト	6層の土をブロック的に特に下部に含む
IV	暗褐色	10YR3/4	シルト	炭化物を微量にまばらに含む
V	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	若干グライ化?炭化物を微量にまばらに含む
VI	にぶい黄燈色	10YR6/4	シルト	本調査区の遺構確認面?

図5　Cトレンチ中央部断面

発見した遺構は住居跡3軒・土坑1基・溝跡3条・性格不明遺構1基・ピット4個である。上述の点からも遺構の遺存状態は不良である。遺物は整理箱10箱程の出土量で、土師器・須恵器・瓦・石製品・金属品・自然石がある。土器類が大半で、まとまりをもつ資料もある。

1）住居跡と出土遺物

SI 1住居跡

〔平面形・規模〕住居北東隅が調査区外へ延びるため全容は不明であるが、平面形は隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は南北辺中央で4.56m・東西辺南側で4.63mを計る。床面積約21m²を有する。西壁の方向はN-20°-Eである。

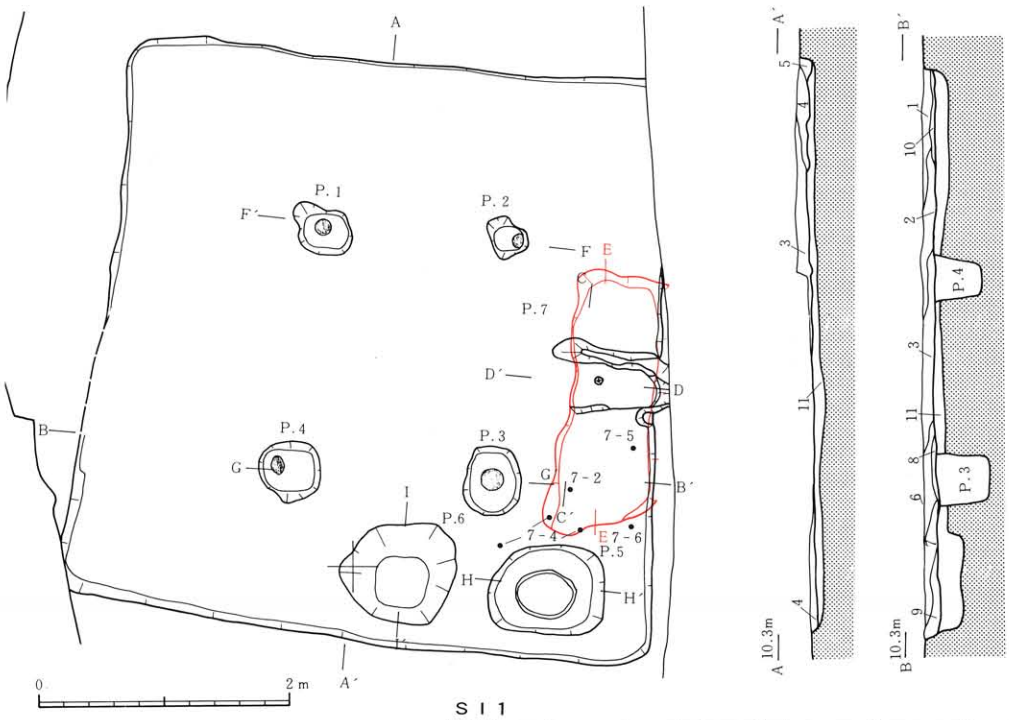
〔重複関係〕SD 1溝跡に切られている。

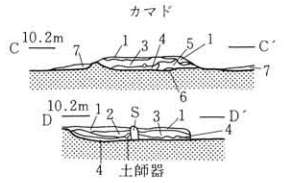
〔堆積土〕細別して10層確認している。黄褐色系シルト層である。大きくみてレンズ状の堆積状況を示している。

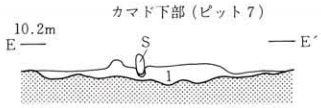
〔壁〕床面からほぼ垂直にたちあがるが、残存壁高は0～16cmである。

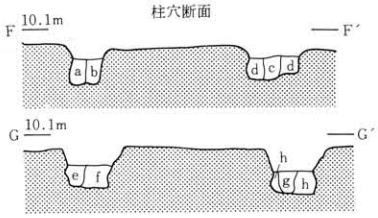
〔床面〕掘り方埋土が床面となっている。上部からの削平のため部分的に凹凸がみられるがほぼ平坦である。

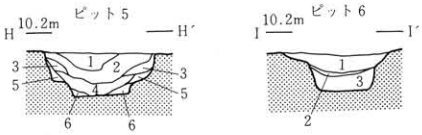
〔柱穴〕床面上でピットを6個検出しているが、住居対角線上にのるピット1～4が位置関係から柱穴と判断される。柱穴掘り方は変形した長方形で大きさは50cm前後である。柱痕跡はすべてにみられ径15～20cmで円形及び長方形を呈している。











ＳＩ１

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10ＹＲ4/6	シルト	酸化鉄粒・マンガン粒をまだらに含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	
3	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/3	シルト	
4	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	
5	明黄褐色	10ＹＲ6/6	シルト	４層に較べマンガン粒多い
6	褐色	10ＹＲ4/4	シルト	
7	明黄褐色	10ＹＲ6/6	シルト	炭化物少量含む
8	褐色	10ＹＲ4/6	粘土質シルト	
9	黄褐色	10ＹＲ5/6	粘土質シルト	
10	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	
11	暗褐色	10ＹＲ3/4	シルト	掘り方埋土
	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	

カマド

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	炭化物若干量含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/3	粘土質シルト	
3	暗褐色	10ＹＲ3/6	シルト	炭化物と焼土の層
4	褐灰色	10ＹＲ4/1	粘土質シルト	灰と焼土の層
5	暗褐色	10ＹＲ3/4	シルト	
6	褐色	10ＹＲ4/6	シルト	
7	黒褐色	10ＹＲ3/2	シルト	灰と焼土の層

カマド下部・ピット７

層位	土色		土性	備考
1	明黄褐色	10ＹＲ6/6	シルト	土師器片を含む。基本的には住居掘り方埋土と同類
	褐色	10ＹＲ4/6	シルト	

柱穴断面

層位	土色		土性	備考
a	褐色	10ＹＲ4/4	シルト	P.2（柱痕跡）
b	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.2
c	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.1（柱痕跡）
d	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.1
e	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.4（柱痕跡）焼土・炭化物を含む
f	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.4
g	明黄褐色	10ＹＲ6/6	シルト	P.3（柱痕跡）
h	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	P.3

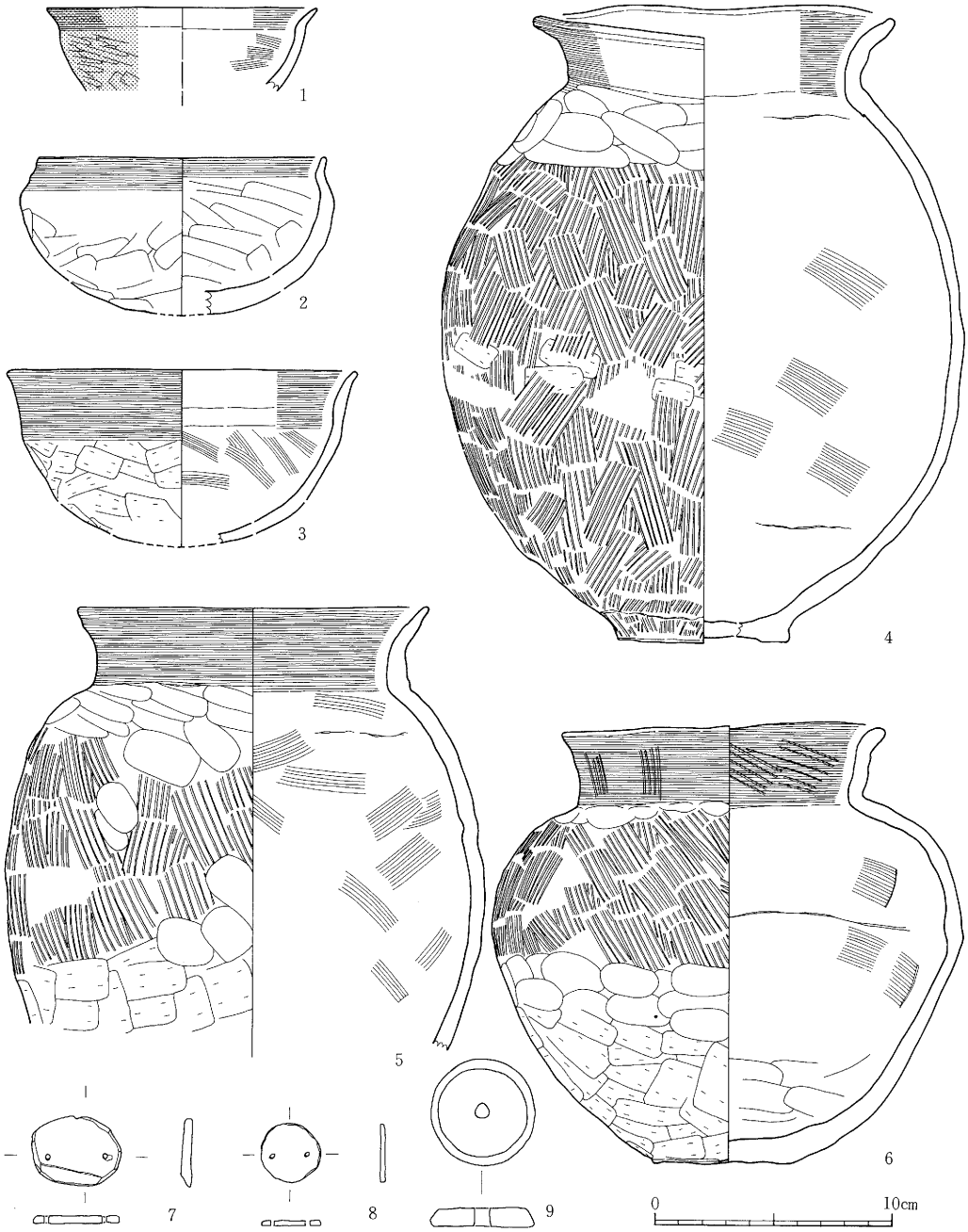
ピット５

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄燈色	10ＹＲ6/4	砂質シルト	炭化物粒・マンガン少量含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	砂質シルト	〃
3	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/3	砂質シルト	
4	灰黄褐色	10ＹＲ5/2	砂質シルト	炭化物粒・マンガン粒少量含む
5	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	砂質シルト	
6	褐色	10ＹＲ4/6	砂質シルト	

ピット６

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	マルガン粒まだらに含む
2	黒褐色	10ＹＲ3/1		炭化物層。焼土をまだらに含む
3	黄褐色	10ＹＲ5/6	砂質シルト	炭化物少量含む

図６　ＳＩ１住居跡



図・番	種	別	層	位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
7-1	土師器	坏	pit	5	口縁部:ヨコナデ,体部:ヘラミガキ・ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ, 体部:ナデ	(115)	—	—	4類	外面黒色処理
-2	土師器	坏	床	面	口縁部:ヨコナデ,体部~底部:ミガキ(ナデ・ケズリ)	口縁部:ヨコナデ, 体部~底面:ナデ	122	—	66	3類	内外とも摩耗著し
-3	土師器	坏	カマド		口縁部:ヨコナデ,体部~底部:ヘラケズリ(ナデ)	口縁部:ヨコナデ, 体部~底面:ナデ	148	—	75	6a類	
-4	土師器	甕	床	面	口縁部:ヨコナデ,体部上部:ナデ,体部~底部:ハケメ(ヘラケズリ),底部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ, 体部~底面:ヘラナデ	153	73	256	2a類	底部:凹形
-5	土師器	甕	カマド 床	面	口縁部:ヨコナデ(ハケメ),体部上部:ナデ,体部~底部:ナデ・ハケメ・ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ(ハケメ),体部~底面:ヘラナデ・ナデ	149	—	—	2a類	
-6	土師器	壺	床	面	口縁部:ヨコナデ,体部上部:ナデ,体部:ナデ・ヘラケズリ・ハケメ	口縁部:ヨコナデ, 体部:ヘラナデ	136	60	184	2類	
-7	石製品	有孔円板	pit	4	楕円形を呈す。縦幅29mm 横幅38mm 厚さ3mm 径2mm程の孔2ヶ						
-8	石製品	有孔円板	埋	土	円形 径25mm 厚さ約2mm 径1.5mm程の孔2ケ						
-9	石製品	紡錘車	埋	土	径44mm 最大厚8.5mm						

(単位:mm)

図7 SI1住居跡出土遺物

〔カマド〕東壁中央部に設置されている。燃焼部のみの確認で煙道部は調査区外へ延びている。燃焼部は側壁のみで南側は削平をうけ残りがわるい。大きさは推定外法75cm・内法35cm・奥行75cm を計る。底面はほぼ平坦で炭化物と焼土に覆われ堅くなっており、中央部には支脚として使用された自然礫が据えられている。奥壁で底面がかるく立ち上がり段となり煙道部へと続く。堆積土は7層確認され、炭化物・焼土・灰が多量にみられ土器片も少量含まれている。

〔その他・施設〕ピット5・6は、カマドの南脇に位置し南壁に沿っていること、底面が平坦で壁が急角度で立ち上がることから、貯蔵穴の性格をもつピットと考えられる。また、カマドの下部で土坑状のピット7を確認しているが、埋土が掘り方埋土とほぼ同じであることからカマドに較べて規模が大きいがカマドの掘り方と考えられる。

〔出土遺物〕床面及びカマド・ピット・堆積土から出土している。種類として土師器（坏・甕・壺）・石製品（紡錘車・有孔円板）があり、カマド周辺で出土した土器群は強い共伴関係にある。図示し得たものは土師器坏3点・甕2点・壺1点、有孔円板2点、紡錘車1点である。

SI２住居跡

〔平面形・規模〕住居東南隅が調査区外へ延びるため全容は不明であるが、平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は南北辺中央で3.95m・東西辺中央で2.65m を計る。床面積約10.4m² を有する。西壁の方向は N-31°-E である。

〔重複関係〕SI 3住居跡を切っている。

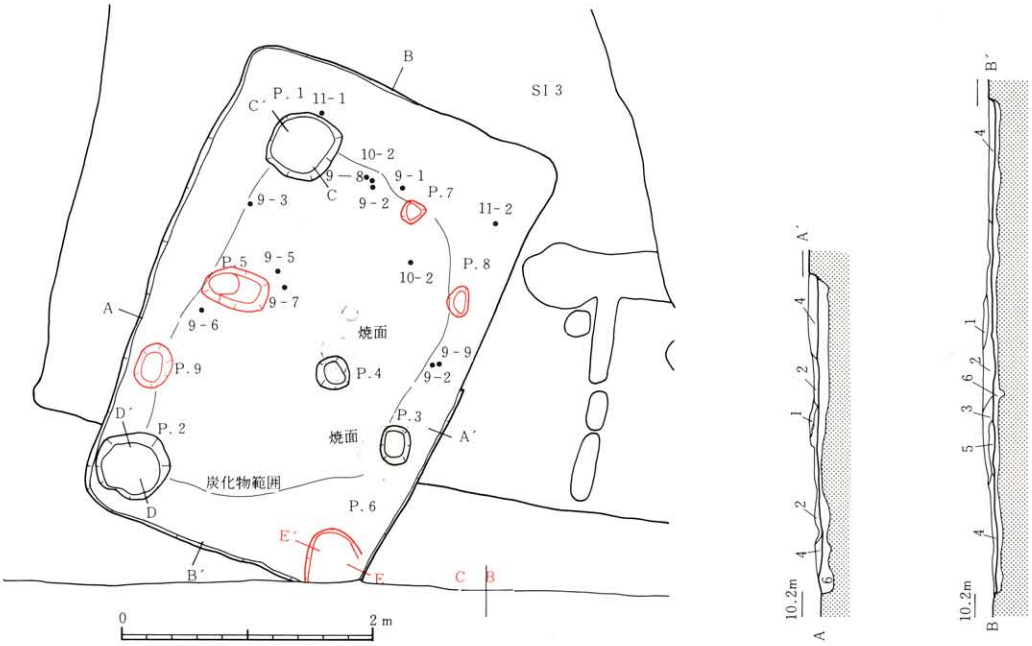
〔堆積土〕細別して5層確認している。黄褐色系のシルト層が主体を占めるが2層の炭化物を含む層が中央部に広がっている。

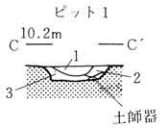
〔壁〕床面から垂直に立ち上がるが、上部からの削平のため遺存がわるく残存壁高は0～6cm である。

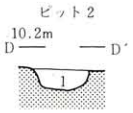
〔床面〕掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。床面でピット（1～4）を確認しているが柱穴にもなりえず性格は不明となっている。また、床面ほぼ全域に炭化物が広がっているがその範囲内に個体数として12個以上の土器群が遺存していた。状況から廃棄したものと考えられた。

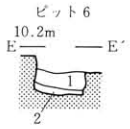
〔その他・施設〕床面で焼土面を3箇所確認している。焼土自体は薄いがその内の2箇所はピット3と4の上に位置しており炉の様な施設かと考えられた。ピット壁に焼面はみられないが埋土には焼土・炭化物が混じる。また、掘り方埋土除去時点でピット（5～9）を確認している。尚、ピット5は位置関係等からみて SI 3住居跡の西南側の柱穴となるものである。

〔出土遺物〕床面及び堆積土2層から多くの遺物が出土している。種類として土師器（坏・鉢・甕・壺・手捏ね土器）・石製品（紡錘車）・自然石（琥珀・水晶）がありつよい共伴関係にある。図示し得たものは土師器坏4点・鉢3点・甕4点・壺1点・紡錘車1点である。









ＳＩ２

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	酸化鉄粒部分的に若干含む
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	炭化物・焼土・灰を多量に含む層。土器片若干含む
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	炭化物を含む
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	酸化鉄粒・マンガン粒をまだらに含む
5	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	４層に較べ若干粘土が強い
6	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	(掘り方埋土)

ピット１

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/6	シルト	焼土・炭化物を含む
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	焼土・炭化物を含む
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	炭化物・土師器含む
4	黄褐色	10YR5/6	シルト	

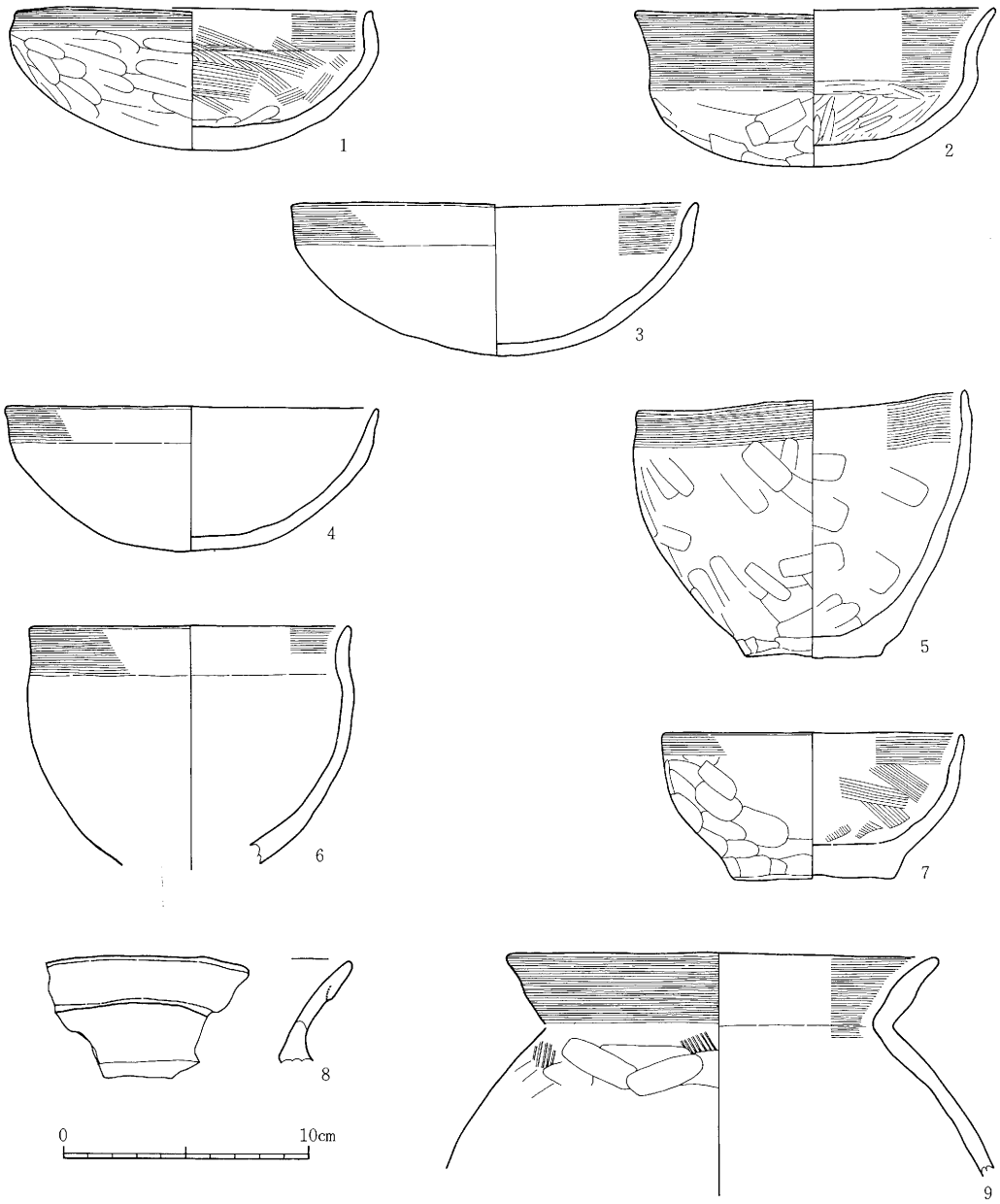
ピット２

層位	土色		土性	備考
1	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	炭化物を含む

ピット６

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10YR4/6	砂質シルト	
2	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	炭化物を少量含む

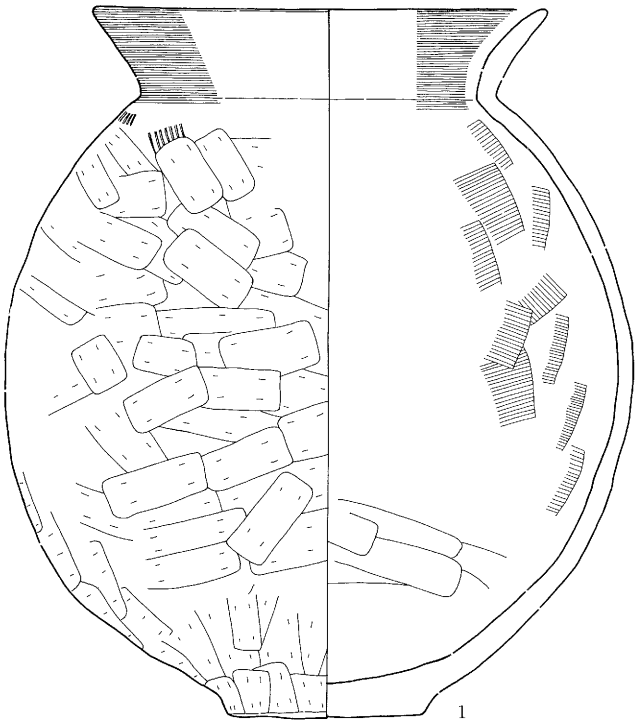
図８　ＳＩ２住居跡

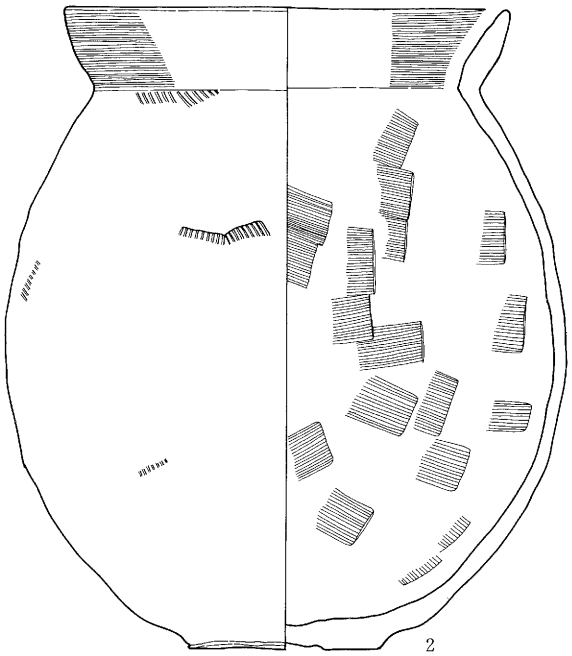


図・番	種	別	層	位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
9-1	土師器	坏	床面直上		口縁部:ヨコナデ,体部~底部:ナデ状のミガキ	口縁部:ヨコナデ,体部~底面:ヨコナデ・ナデ	145	—	57	2a類	
-2	土師器	坏	堆	土	口縁部:ヨコナデ,体部~底部:ケズリ状のナデ	口縁部:ヨコナデ,体部~底面:ヘラミガキ	147	—	64	6b類	
-3	土師器	坏	床面直上		口縁部:ヨコナデ, 体部~底部:不明	口縁部:ヨコナデ, 体部~底面:不明	165	—	62	2b類	
-4	土師器	坏	pit	1	口縁部:ヨコナデ, 体部~底部:不明	不明	152	—	60	2c類	
-5	土師器	鉢	埋	土	口縁部:ヨコナデ,体部~底部:ケズリ状のナデ	口縁部:ヨコナデ, 体部~底面:ナデ	134	56	105	1a類	
-6	土師器	鉢	埋	土	口縁部:ヨコナデ, 体部:不明	口縁部:ヨコナデ, 体部:不明	131	—	—	1b類	
-7	土師器	鉢	埋	土	口縁部:ヨコナデ,体部:ナデ,底部:ケズリ状のナデ	口縁部:ヨコナデ,体部~底面:ヘラナデ	123	66	60	2類	
-8	土師器	壺	埋	土	内外面とも調整不明		—	—	—	1類	複合口縁
-9	土師器	甕	床	面	口縁部:ヨコナデ, 体部:ナデ・ハケメ	口縁部:ヨコナデ, 体部:不明	177	—	—	2類?	

(単位:mm)

図9　SI2住居跡出土遺物（1）

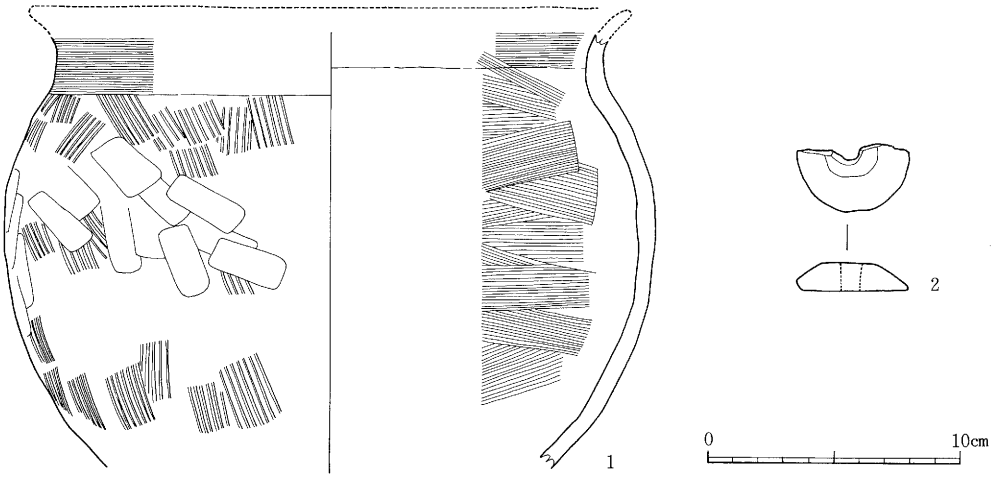




図・番	種別		層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
10-1	土師器	甕	床面直上	口縁部:ヨコナデ,体部～底部:ヘラケズリ,ハケメ	口縁部:ヨコナデ,体部～底面:ヘラナデ・ナデ	181	78	281	2b類	
-2	土師器	甕	床面	口縁部:ヨコナデ,体部～底部:ハケメ	口縁部:ヨコナデ,体部～底面:ヘラナデ	176	75	254	2b類	底部凹形

(単位：mm)

図10　ＳＩ２住居跡出土遺物（２）



図・番	種別		層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
11-1	土師器	甕	床面	口縁部:ヨコナデ,体部:ナデ,ハケメ	口縁部:ヨコナデ,体部:ヘラナデ	—	—	—	1類	
-2	石製品	紡錘車	床面	径45mm, 最大厚11mm, 欠損面に研摩がみられ再利用の可能性有り						

（単位：mm）

図11　ＳＩ２住居跡出土遺物（３）

SI３住居跡

〔平面形・規模〕住居北壁部が調査区外になるため全容はつかめないが、平面形は柱穴の位置からみて隅丸の正方形を呈すると考えられる。規模は東西中央部で6.3m を計り、床面積推定約40m² を有する。西壁の方向は N-23°-E である。

〔重複関係〕SD 1 溝跡・SI 2 住居跡両者に切られている。

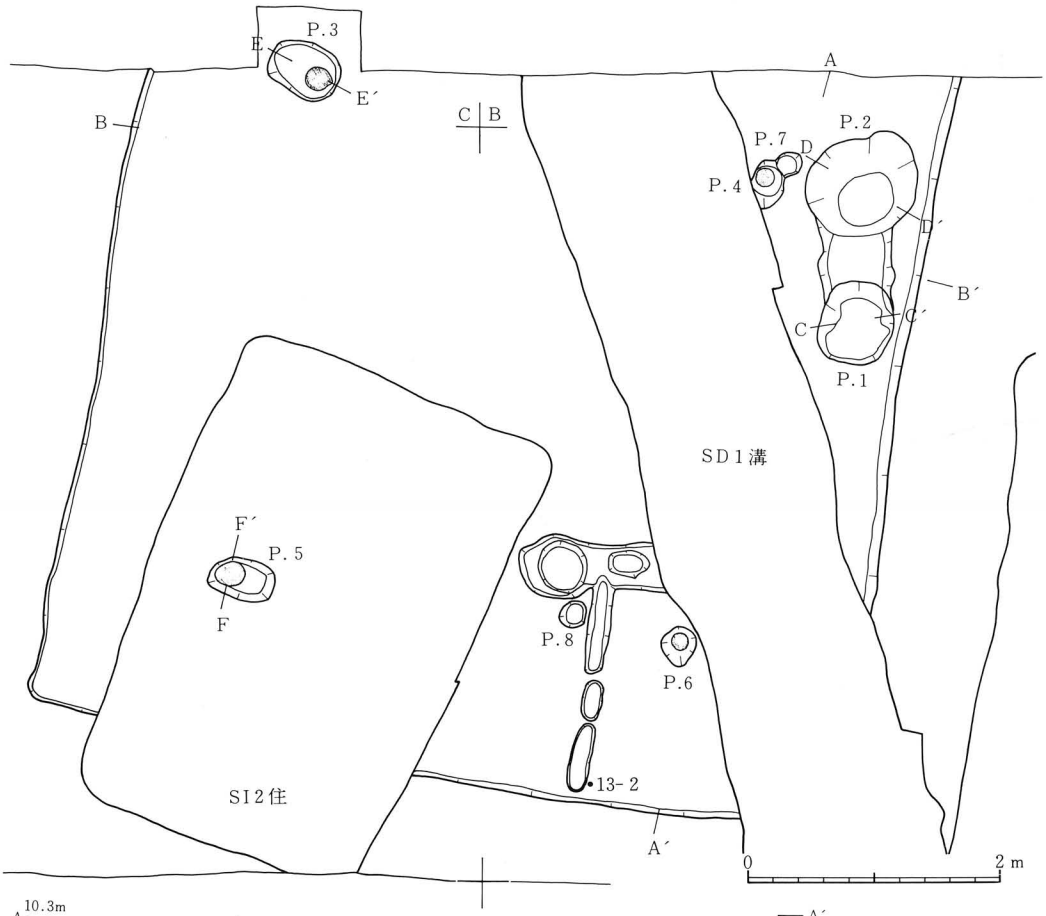
〔堆積土〕遺構確認時でほとんど床面の状態であったため、1 層（暗褐色のシルト）のみの確認となっている。

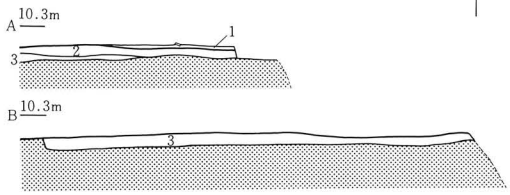
〔壁〕東辺側のみに壁面が遺存し、床面から垂直に立ち上がる。残存壁高は 0 ～10cm である。

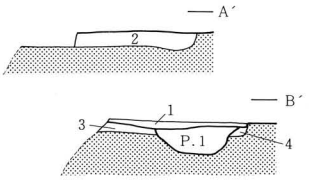
〔床面〕掘り方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕住居跡の四隅、対角線上にのるピット 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 が位置及び柱痕跡から柱穴と判断される。柱穴掘り方は円形を基調とする長円形及び不整形で、不整形を呈する東側柱穴列は西側に較べて規模が小さい。柱痕跡は径14～24cm で円形及び長円形を呈し、ピット 3 では深さ60cm を計る。

〔その他・施設〕住居内北壁東側断面に焼土及び炭化物が認められている。断定はし得ないが位置関係等からカマドの存在が考えられた。これに関連してピット 1 と 2 は位置・形態から貯蔵穴の性格をもつピットと考えられる。また、住居南東部にＴ字形に交わる 2 本の溝状の落ち込みがある。北側のものにはピットが 2 個みられ、南側のものは 2 箇所途中で途切れる。深さは10cm 程と浅い。住居辺に直角に交わることなどから間仕切りの跡とも考えられる。







ＳＩ３

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10ＹＲ3/4	シルト	炭化物・焼土・土師器片含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	掘り方埋土 上部に炭化物を含む
3	褐色	10ＹＲ4/6	シルト	掘り方埋土 土師器片含む

ピット１

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄橙色	10ＹＲ6/4	シルト	焼土・炭化物を含む
2	黄褐色	10ＹＲ5/6	シルト	焼土・炭化物少量含む
3	明黄褐色	10ＹＲ6/8	シルト	
4	黄橙色	10ＹＲ7/8	シルト	壁の崩壊土

ピット２

層位	土色		土性	備考
1	褐色	10ＹＲ4/4	シルト	炭化物を含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	シルト	炭化物・焼土少量含む

ピット３

層位	土色		土性	備考
1	黄褐色	10ＹＲ5/6	砂質シルト	(柱痕跡)
2	明黄褐色	10ＹＲ6/6	砂質シルト	

ピット５

層位	土色		土性	備考
1	暗褐色	10ＹＲ3/4	シルト	炭化物を少量含む
2	にぶい黄褐色	10ＹＲ5/4	粘土質シルト	(柱痕跡)

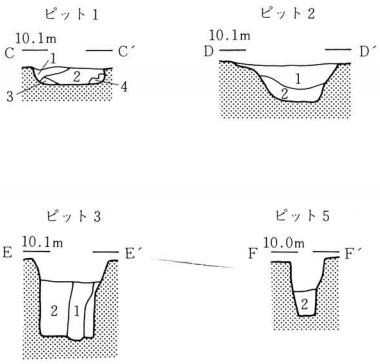
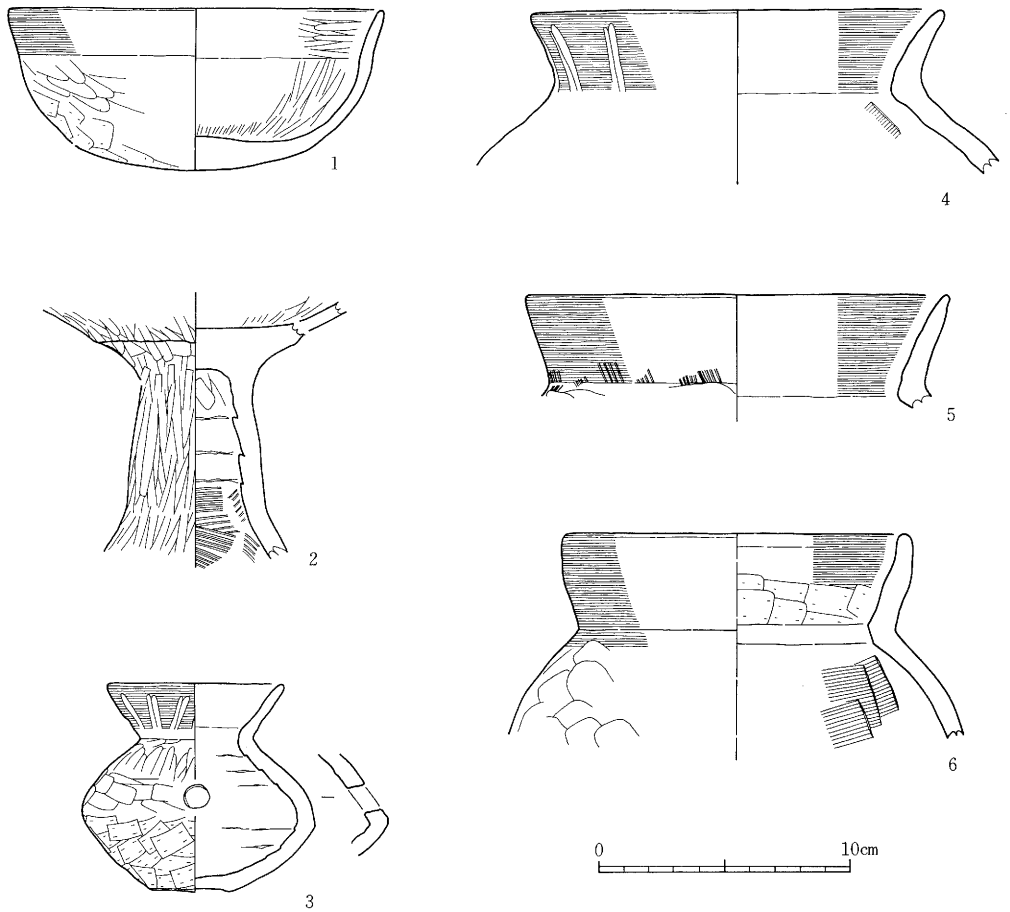


図12　ＳＩ３住居跡

〔出土遺物〕床面・各ピット・堆積土からの出土であるが絶対量は少ない。種類は土師器のみで坏・高坏・甕・甑がある。図示し得たものは、土師器坏１点・高坏１点・甕２点・壺１点・甑１点である。



図・番	種別		層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
13-1	土師器	坏	pit 1	口縁部:ヨコナデ,体部～底部:ヘラミガキ,ヘラケズリ	口縁部: 底部：ヘラミガキ	150	－	64	5類	
-2	土師器	高坏	埋土	坏部～脚部：粗いヘラミガキ	坏部:ヘラミガキ,脚部:ナデ・ハケメ	－	－	－		
-3	土師器	甑	床面	口縁部：ヘラヒガキ・ヨコナデ,体部上部:ヘラミガキ,体部～底部:ナデ・ヘラケズリ	口縁部:ミガキ？,体部～底部:ナデ？	71	32	83		孔１ヶ 底部:浅い凹形
-4	土師器	甕	pit 1	口縁部:ヘラミガキ・ヨコナデ,体部:不明	口縁部：ヨコナデ, 体部：不明	164	－	－	2類？	
-5	土師器	甕	埋土	口縁部:ヨコナデ・ハケメ,体部:ナデ・ハケメ	口縁部：ヨコナデ, 体部：不明	164	－	－	2類？	
-6	土師器	壺	pit 1	口縁部:ヨコナデ,体部:ナデ・ヨコナデ	口縁部:浅いケズリ・ヨコナデ,体部:ヘラナデ	(139)	－	－	3類	

(単位：mm)

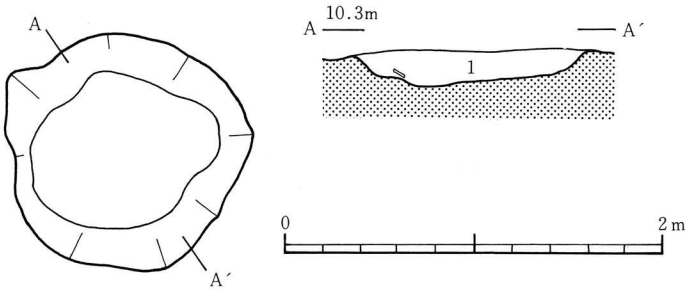
図13　ＳＩ３住居跡出土遺物

２）土坑と出土遺物

SK１ 土坑

SI3 住居跡南側に位置している。平面形は円形を基調とするがやや歪んでいる。規模は径124～130cm で、深さは最大で19cm を計る。堆積土は１層（黒褐色）で地山土をまだらに含んでおり人為堆積と考えられる。底面には凹凸がみられ東側がやや低くなっており壁は緩やかな

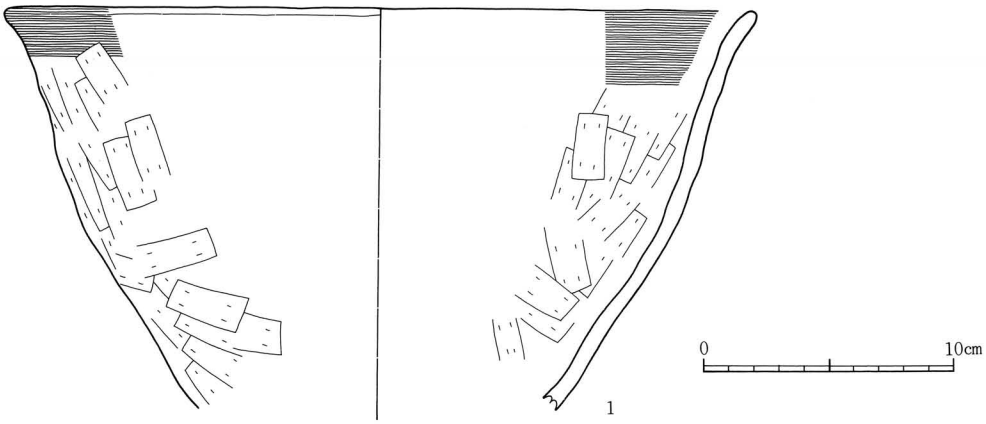
立ち上がりとなっている。遺物には土師器坏・甕・鉢・須恵器甕・鉄滓があるがすべて破片である。図示し得たものは鉢１点である。



ＳＫ１

層位	土　　色		土　性	備　　考
1	黒　褐　色	10ＹＲ⅔	シ　ル　ト	明黄褐色(10ＹＲ⅝)土をまだらに含む。土師器・須恵器片を含む

図14　ＳＫ１土坑



図・番	種　別		層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	口径	底径	器高	分類	備
15-1	土師器	鉢	1　層	口縁部:ヨコナデ,体部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ,体部: ヘラケズリ	(300)	－	162	3類	甑？

(単位：mm)

図15　ＳＫ１土坑出土遺物

3）溝跡と出土遺物

SD1 溝跡

Ｂ区に位置し、SI 1・SI 3両住居を切っている。確認長は9.5mを計り、ほぼ直線的に延び方向はN-6°-Wである。上端幅1.4～1.7m、底面幅0.4～0.6m、深さ0.5～0.6mを計り、底面高は北側が南側に較べて若干低くなっている。断面形は壁中断に張り出しがみられるがほぼ逆台形を呈し、底面には浅い凹凸がみられるが平坦である。堆積土は５層確認しており、黄褐色系の砂質シルトである。尚、５層下部でシルト質の砂を確認している。出土遺物には土師器片

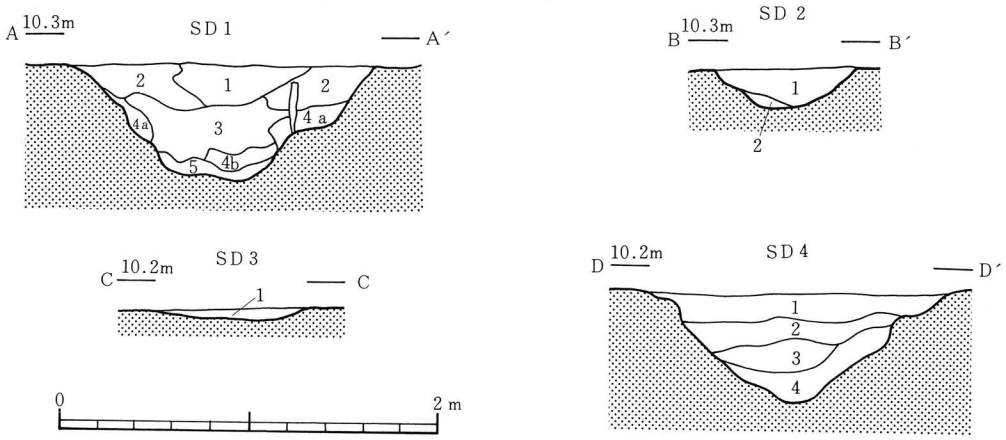
（坏・甕）及びこぶしだいの礫があるが、底面での出土はない。

SD2 溝跡

D～E 区に位置し、ピット B に切られている。確認長は9.5m を計り、南側でやや東側に屈曲をみる。上端幅0.5～1 m、底面幅0.15～0.65m、深さ0.06～0.28m を計り、底面高は北側が低い。断面形は皿状を呈するが南側へ向かうにつれて浅くなり、底面は凹凸がつよくなる。堆積土は 2 層みられ黄褐色系のシルトである。出土遺物はない。形態及び方向から SD 3 溝跡へ続くものとも考えられる。

SD3 溝跡

G～M 区に位置し、SD 4 溝跡を切っている。調査区南壁に沿う様に蛇行しながら延びており、確認長は約30m を計る。上端幅0.9～1.9m、底面幅0.2～1.2m、深さ0.02～0.2m を計り、全体的な統一がみられない。断面形は浅い皿状で、底面には部分的にブリッジ状の高まりもみ



SD 1

層位	土色		土性	備考
1	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	層中で灰黄褐色土と酸化鉄粒がレンズ状堆積を細かく示す
2	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	1層に較べやや砂質，酸化鉄粒が層全体にまだらにみられる。マンガン粒若干みられる
3	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	酸化鉄粒1・2層に較べ都きく含む。炭化物粒若干含む
4a	褐色	10YR4/6	砂質シルト	上層に較べ酸化鉄粒多し。上部にマンガン粒が若干みられる
4b	褐色	10YR4/4	砂質シルト	酸化鉄・マンガン粒まだらに含む
5	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	最下部にシルト質の砂がみられる

SD 2

層位	土色		土性	備考
1	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	部分的に砂を層的に含む。全体的に酸化鉄をまだらに含む
2	明黄褐色	10YR6/6	砂質シルト	下部に酸化鉄の集積層が形成されている

SD 3

層位	土色		土性
1	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト

SD 4

層位	土色		土性
1	褐色	10YR4/4	粗砂
2	褐色	10YR4/6	粗砂
3	明黄褐色	10YR6/6	粗砂
4	褐色	10YR4/6	粗砂

図16　各溝跡断面

られるが、全体的には細かい凹凸が広がる。底面高はやや東側が低い。堆積土は1層で灰黄褐色の砂質シルトである。出土遺物には土師器片・石器片がある。

SD4 溝跡

G～I区に位置し、SD3溝跡に切られている。確認長は11mを計り、直線的に延びている。上端幅1.5～1.8m、底面幅0.5～0.8m、深さ0.4～0.6mを計る。断面形は深い皿状を呈し、底面高は北側がやや低い。堆積土は4層確認し、すべて粗砂である。出土遺物はない。

4）その他

SX1 性格不明遺構

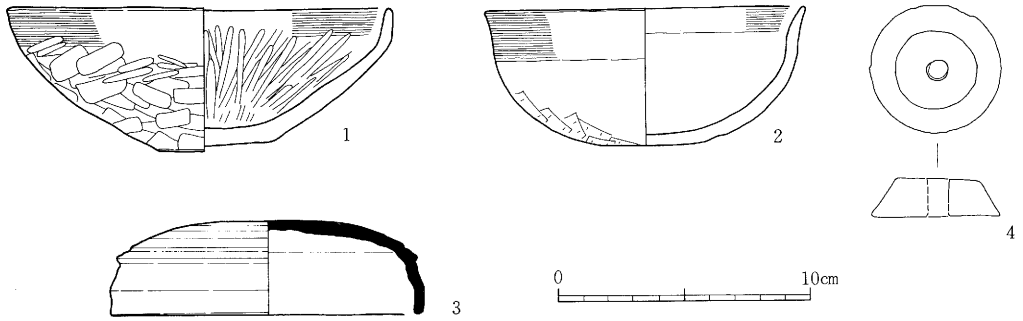
L区で確認している。炭化物が面的に広がるもので、北側が調査区外へ延び全容は不明であるが、方形プランを呈するものと考えられる。東西軸で2.05m、南北軸で1.25mまで計れる。遺物として炭化物面及び底面より土師器片が数点出土している。住居又は土坑が削平をうけ底面のみが遺存しているものと考えられた。

ピット

調査区内で計4個検出している。埋土に炭化物・焼土を含むものがあるが性格は不明である。土師器片が少量出土している。

その他の出土遺物

I層（畑地及び水田）中より土師器坏・高坏・甕・鉢、須恵器甕、瓦（丸瓦玉縁部）、紡錘車、剝片石器が出土している。また、G－2グリッドの遺構確認面上で土師器坏と須恵器蓋が同一地点で出土しており、共伴遺物と考えられる。



図・番	種	別	層	位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
17-1	土師器	坏	Ⅵ層上面		口縁部:ヨコナデ,体部～底部:ケズリ状のミガキ	口縁部:ヨコナデ,体部～底面:ヘラミガキ	153	46	57	1類	3と共伴
-2	土師器	坏	Ⅰ	層	口縁部:ヨコナデ,体部～底部:ヘラケズリ	口縁部:ヨコナデ,体部～底面:不明	127	—	54	5類	
-3	須恵器	蓋	Ⅵ層上面		ロクロ調整 天井部:回転ヘラケズリの後ロクロ調整	ロクロ調整 部分的にナデ	124	—	38		1と共伴
-4	石製品	紡錘車	Ⅰ	層	径 51mm 最大厚 15mm						

(単位：mm)

図17 その他の出土遺物

Ⅳ．遺物と遺構について

1）遺物について

今回の調査で出土した遺物の種類には土師器・須恵器・石製品・金属品・自然石があり、量的にも少なく図示資料も総数33点にとどまっている。この中では土師器類が最も多く、出土状況からみてもまとまりをもつ土器群であった。ここでは土器類のみに着目し種類毎に特徴をみてみたい。

①（土師器）

器種として坏・高坏・甕・壺・鉢・甑・手捏ね土器がある。すべて成形段階でロクロ不使用のものである。図示点数は28点である。

坏

図示資料は9点である。形態の特徴から下記の様に分類できる。

1類：底部は平底で、体部は外傾気味に立ち上がり、口縁部は外傾及び直立気味のもの。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はケズリ状のミガキ、底部はケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部から底面にかけて放射状のヘラミガキが施される。

2類：底部は丸底で、体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部の形状に違いがあり内傾するもの(a)・外傾及び直立気味で内面が外反するもの(b)・外傾及び直立気味で内面が内弯するもの(c)の三種に分けられる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部は(a)でナデ状のミガキ、内面は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヨコナデ・ナデが施される。

3類：底部は丸底で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は内傾しさらに端部が直立及び外傾するもの。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてはナデ・ケズリの後ミガキである。内面は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてはナデが施される。

4類：口縁部付近の資料で全容は不明である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に短く外傾するもの。口縁部内側に明瞭な稜がみられる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキとヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部にはナデが施される。

5類：底部は丸底で、体部は内弯気味に立ちあがり、口縁部はゆるく外反するもの。口縁部内側にはゆるい稜がみられる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はミガキ・ヘラケズリで、底部はヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ又はヘラミガキ、体部から底面にはヘラミガキが施される。

6類：底部は丸底で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反するもの。口縁部と体部の境には明瞭な稜が形成される。底部の形状の違いから、丸みをもつもの(a)とやや偏平気味の

もの(b)の二種に分けられる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施され、内面は口縁部がヨコナデ、体部から底面にかけては(a)ではヘラナデ様のナデ、(b)ではナデの後ヘラミガキである。

これらの坏類は概ね丸底を呈し、大きさは口縁径が12～17cm大を計り15cm内外のものが多く、器高は5～8 cm大で6 cm内外のものが多い。尚、口縁部の形状をみると1～4類のものは器高に対し口縁部の幅が小さく、6類は大きく、5類はその中間的である。

高坏

図示資料は1点のみである。口縁部と裾部が欠損しており全容は不明であるが、坏部は下部にかるい段（屈曲）がみられ外傾気味に立ち上がる。脚部は中空で上部がやや脹らみをもち下部が外方へ開くものである。器面調整は外面がすべて粗いヘラミガキ、内面は坏部がヘラミガキ、脚部がナデ及びハケメとなっている。残存高は10.2cmである。尚、同一個体と考えられる坏部資料があり口縁端にかけてかるく内弯気味に立ち上がるものである。

甕

図示資料は9点である。形態の特徴から下記に分類できる。

1類：口唇部及び底部が欠損しているが、体部は丸みをもち立ち上がり最大幅は中央部に位置し口縁部は直立及び外傾気味に立ち上がるもの。他のものに較べて口縁径が大きく広口である。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はハケメの後ナデである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデである。

2類：体部は倒卵形で丸みをもち立ち上がり最大幅は中央部に位置し、口縁部は外傾及び外反気味で口唇部で丸くおさまるもの。口縁部の形状の違い、直立し外反気味に端部へいたるもの(a)と、外傾気味に端部にいたり中央部分が肥大し肉厚となるもの(b)、の二種に分けることができる。尚、両類とも底部に凹面のみられるものがある。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はナデ・ハケメ・ヘラケズリが施され(a)はハケメが主体で(b)はケズリが主体である。底部はケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデ、底面はナデのみられるものもある。

大きさをみると、1類は残存口縁径が22cm・残存高が16.9cmで推定器高22cm内外・最大幅が25.7cmである。2類は(a)で口縁径が15cm大・器高が25cm大・最大幅が20～21cm大、(b)では口縁径が17～18cm大・器高が25～28cm大・最大幅が22～25cm大で、両類は器高に大きな違いはないが口縁径及び体部最大幅に違いがみられる。

壺

図示資料は3点である。口縁部の形態に違いがみられ3類に分けられる。

1類：口縁部破片資料である。複合口縁のもので外反気味に立ち上がるものである。内外面

とも摩滅のため器面調整は不明である。

2類：体部は底部端から外傾気味に丸みをもって立ち上がり最大幅は中央部やや上方に位置し、口縁部は直立及び外傾気味で口唇部付近でさらにかるく外傾し丸くおさまる。体部上部（肩部）に張りがみられる。器面調整は外面で口縁部がハケメの後ヨコナデ、体部は上半部がハケメの後ナデ、下半部がヘラケズリの後ナデで、底部はケズリである。内面は口縁部がハケメの後ヨコナデ、体部はヘラナデ、底面はナデとなっている。大きさは口縁径が13.6cm・器高が18.4cm・最大幅が19.8cmである。

3類：口縁部から体部上部の破片資料である。体部はやや丸みをもちながら立ち上がり、口縁部が外傾しさらに直立し口唇部で丸くおさまる。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部はヨコナデの後ナデである。内面は口縁部がヨコナデの後浅いヘラケズリ、体部にはヘラナデがみられる。大きさは口縁径が13.9cmである。

このように壺類は3点のみの資料で甕類との区別が明確化されないが肩部の張るものに限定している。全体として一回り小さい形とはなっている。

鉢

図示資料は4点である。形態の違いから3類に分けられる。

1類：底部から内弯及び外傾気味に丸みをもって立ち上がり口縁部にいたり丸くおさまるもの。口縁部内外面の形態から、直立及び内傾気味で口唇部がかるく反るもの(a)と直立及びかるく外反するもの(b)の二種に分けられる。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は(a)で外面がケズリ状のナデ、内面は底面までナデで、底部はケズリである。

2類：底部から内弯し立ち上がり口縁部は直立気味で端部が丸くおさまるもの。口縁径に比して器高が小さく1類と区別され、底部も厚い。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部が外面がナデ、内面がナデ及びヘラナデである。底部には棒状の木葉の圧痕がみられる。

3類：口縁部から体部にかけての破片資料であるため全容は不明である。底部から外傾及び内弯気味に立ち上がり口縁部でかるく外傾し端部が丸くおさまる。器面調整は口縁部で内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともヘラケズリである。全体的にみて器面に凹凸がみられ粗い作りである。

大きさは2a・2b両類とも口縁径が13cm大、器高は11cm内外、最大幅が13cm大で同様な大きさをもち、1類は口縁径が12.3cmで器高が6 cmと2類に較べて半分の大きさである。3類は破片資料であるため正確な数値が出し得ないが、口縁径は30cm前後で器高は16.2cmまで計れ、1・2類に較べて大形のものである。

瑤

1点のみの出土である。口縁部が半分ほど欠損するが全容は理解される。底部は平底で、体

部は算盤玉状を呈し中央部付近に径１ cm ほどの孔が一ケ穿たれ、口縁部は外傾し口唇部で丸くおさまる。最大幅は体部中央部に位置する。器面調整は外面で口縁部がヘラミガキの後ヨコナデ、体部は上部にヘラミガキ・中央部にナデ・下部にヘラケズリが、底部にはナデ及びケズリが、内面は摩滅等のため判然としないが口縁部はミガキ、体部から底面はナデが施されている。大きさは口縁径が7.1cm・器高が8.1cm・最大幅が体部中央部で9.2cm である。

手捏ね土器

１点出土している。破片資料で全容は不明であるが、やや偏平な丸底を呈し口縁径は８ cm 内外で器高は4.5cm 程である。坏５類を小振りにした形である。内外面とも指のオサエ・ナデで成形されている。

②（須恵器）

器種として蓋・甕があるが、図示資料は蓋１点のみである。

甕

３点のみの出土ですべて体部破片資料である。器面調整は外面が平行タタキで、内面には平行状のオサエとナデがみられる。

蓋

天井部は偏平な丸みをもつもので口縁部との境には断面三角形のつまみ出しの突出があり、口縁部は外方へ開き気味でやや内弯し端部にいたる。端部は平坦である。器面調整は外面で天井部が回転ヘラケズリの後ロクロ調整、口縁部はロクロ調整、内面は天井部から口縁部にかけてロクロ調整で部分的にナデもみられる。大きさは口縁径が12.4cm・器高が3.8cm である。

③（土器群の年代等について）

上記において各土器類の特徴について述べ分類まで行ったが、多くのものは住居跡出土のもので、遺物の出土状況をみると各々強い同時性が考えられるものであった。これらの土器類は器形的な特徴から土師器編年の南小泉式に位置づけられるものと判断されるが〔註１〕、住居跡間の器種構成の点や切り合い関係の存在などから、各住居跡出土の土器群を一つのグループとしてとらえることが可能で、遺構間には時間的な差が存在するものと考えられた。これらの点を踏まえ、各住居跡と同様な土器構成及び土器類をもつ遺構との比較を行い、南小泉式の中での土器群の位置づけを試みたい。ここでは便宜的に坏類を主体としてみる。

１住居類似資料（坏３類・坏４類・坏6a 類に類似相当する土器を含む資料）としては、角田

	坏									高坏	甕			壺			鉢				鼎	備
	1	2a	2b	2c	3	4	5	6a	6b		1	2a	2b	1	2	3	1a	1b	2	3		
1 住					●	●		●				●2点			●							有孔円板２点
2 住		●	●	●					●		●		●3点	●			●	●	●			手捏ね土器1点
3 住							●			●			○2点			●					●	

表２　住居跡出土各土器類構成

市住社遺跡住居跡出土土器〔註２〕・仙台市富沢窯跡出土土器〔註３〕がある。住社遺跡の出土土器には甕形土器・深鉢形土器・鉢形土器・壺形土器・甑様土器・坏形土器があり、器面調整等不明な点はあるが坏３類に坏形土器５が、坏6a 類に口縁部に若干の違いがあり6b 類がより近似はするが坏形土器１が器形的に類似している。住社遺跡の出土土器は住社式の標式土器となるもので、坏類（坏形土器）７点のうち主体となるものは底部が偏平な丸底で口縁部の比率が器高に対し大で口縁部が大きく外反するもので、今回の調査では確認出来なかった器形である。甕類（甕形土器・深鉢形土器）は形状の知られるものが５点あり、長胴を呈するものがほとんどである。富沢窯跡の出土土器には坏・鉢・小甕・小壺がある。これらは埴輪窯の祭祀に関係する一括の土器群で石製模造品も共伴している。そのうち坏類は５点あり図１－２が坏３類に、図１－３が坏４類に類似している。報告ではこれらの土器群は引田式の範疇におさまるもので５世紀後半～６世紀初頭の年代が与えられるとし、埴輪の主たる供給先である裏町古墳の副葬品の年代からしても裏付けられるとしている。

２住居類似資料（坏2a 類・坏2b 類・坏2c 類・坏6b 類に類似相当する土器を含む資料）は管見の限りではみられないため個々の類でみることにする。坏２類に類似するものは多賀城市山王遺跡３号遺構出土土器、古川市留沼遺跡第３次調査Ⅵ層出土土器・仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第１号住居跡出土土器・同市南小泉遺跡第４次調査第16号住居跡出土土器等〔註４〕がある。これらの坏類は南小泉式としてとらえられ、各遺構のなかで他の器種と組み合い変遷が考えられているものである。坏6b 類は１住居でもふれた様に住社遺跡出土坏形土器１に類似する。２住居では坏6b 類が主体とはならず坏２類であることなどから、１住居同様に住社式よりも前出的なものと考えられる。尚、甕類は１住居同様球形を呈するものであるが、より丸みをもつ点、器面調整にヘラケズリ・ナデが多用される点があり坏類の構成の相違も含めて土器群としては１住居よりも先行するものではないかと考えられる。

３住居類似資料（坏５類に類似相当する土器を含む資料）としては、南小泉遺跡第１号竪穴住居跡出土土器〔註５〕・福島県大玉村上高野遺跡２号住居跡出土土器〔註６〕がある。南小泉遺跡の出土土器には坏・高坏・壺・甕がある。そのうち坏類は３点あり、坏５類に類似するもの第９図（３）、坏6a 類に類似するが坏５類にも類似し中間な様相をもつもの第９図（１）、坏4a 類を偏平にした器形のもの第９図（２）がある。高坏は破片資料で器形は不明である。壺は口縁部が大きく開くもので体部は球形を呈する。甕は体部が倒卵形を呈するものが主体をしめる。報告では坏や壺・甕の器形的特徴から古墳時代中期後半段階のものとしている。上高野遺跡の出土土器には坏・高坏・壺・甕・甑・須恵器坏がある。そのうち坏類は12点あり５類に分類されている。大別すると口縁部と体部の境で口縁部がわずかにくびれ外反し内側に稜がみられるもの（Ⅰ～Ⅳ類）と、底部から口縁部にかけて丸みをもって立ち上がり口縁部が内弯及び直立

気味のもの（V類）の二つに分けられる。底部は丸底及び平底に近い丸底のものがある。主体となるものは前者で10点あり、そのうちⅠ類に分類されるものが坏5類に類似するがII～IV類と較べて内側の稜はさほど明瞭ではなく立ち上がりも直立気味と相違がみられる。II～IV類は坏4類に基本的に類似している。尚、報告では甕などの一部不明な器種を除きいわゆる引田式の範疇で把えられる一括遺物であるとし、共伴している須恵器坏等から6世紀前半代を中心とした時期が考えられるとしている。

以上、1～3住居出土土器に類似する土器類を坏を主体として各遺跡で比較を行ったが、当住居の土器群は大きく土師器編年での南小泉式から引田式の範疇に属することが確認できた。尚、岩切鴻ノ巣遺跡での報告では、当住居跡出土土器と同類のものを第II群土器として分類し、「本群の土師器の中から引田式に類似する土器だけを抽出して分離することは、多くの無理がある。……引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式に位置づけるのが妥当と思われる。」としている。これらの説に従えば、当住居出土土器類も大きく南小泉式に位置づけられる。また、亘理町宮前遺跡の報告〔註7〕では上記の点が同様に確認されるとして、さらに南小泉式土器をA・B・Cの土器群に分け変遷を提示している。当住居跡の土器群はC群土器に類似するものもみられるが、坏6類や甕の特徴からより新しい段階のものと考えられる。南小泉遺跡第14次調査SI-01住居跡出土土器〔註8〕も同様にC群土器の段階よりも新しいもので、住社式直前頃の時期が想定されている。このように中間的様相を示す土器群の存在があり、現時点では論をもち得ないが、型式的な問題も含めて明確な基準検討が必要になってきていると考えられる。

当住居跡は重複関係及び出土土器の検討からみて、3住居は2住居に先行し2住居は1住居に先行するものと考えられ、3住居→2住居→1住居の順に新しくなるものと理解される。年代は、上述の類似土器群の年代及び次型式になる住社式の土器の年代（名取市清水遺跡第40号住居跡〔註9〕で当式の土器類と伴に陶邑古窯跡群のTK-10に類似する須恵器高坏が出土していることから、6世紀中頃を中心とする時期を想定している）から6世紀前半を中心としたものが考えられる。

2）遺構について

① 住居跡

3軒確認しているが、すべて竪穴式のものである。出土遺物の検討から3軒とも南小泉式期の末、住社式期の直前に属し、各住居跡間の前後関係については3住居→2住居→1住居の順

	平面形	規模	面積	主柱穴	周溝	カマド	炉	その他の施設	方向
SI1住	隅丸方形	4.56×4.63	21	4本	なし	東壁部	なし	貯蔵穴	N−20°−E
SI2住	隅丸長方形	3.95×2.65	10.4	なし	なし	なし	中央部に有		N−34°−E
SI3住	隅丸方形	6.3×？	推定40	4本	なし	北壁部？	なし	貯蔵穴	N−23°−E

表3　住居跡観察表　（単位：m・m²）

に新しくなるものと考えられた。住居跡の特徴については下表のとおりである。

平面形は3軒とも隅丸の方形及び長方形を呈している。大きさは3住居が一辺6 mを超す大形のもので仙台周辺及び南小泉遺跡内で確認されている同時期の住居跡と比較しても大形の部類に属するもので、1・2住居は一般的にみられる大きさのものである。大きさとともに住居構造をみると、1・3住居と2住居には大きな違いがみられた。前者は住居内に4本の柱穴をもち、1住居では東壁に3住居では推定であるが北壁にカマドをもち、カマド右脇に貯蔵穴状のピットが位置している。これに対し2住居は規模もやや小さく、住居内に柱穴も検出されず、床面中央に地床炉と考えられる焼土面が確認されている。当住居では多くの土器群と伴に未加工品であるが琥珀や水晶の自然石が出土している。これらの点からみて前者は一般的な住居形態をもつものと判断されるが、後者は機能停止後に土器類の捨て場として使用されている経緯があり遺物の帰属の問題があるが、住居構造の点を含めてみると工房としての性格も考慮されるものである。

② 土　坑

1基のみの確認で、他の遺構との関連は不明である。堆積土及び出土遺物の状況から廃棄を性格とする遺構と考えられる。遺物がすべて破片であるため所属時期を明らかにし得ないが、住居跡群と同時期のものであろうか。

③ 溝　跡

4条確認しているが、SD 1溝跡とSD 4溝跡は調査区内を直線的に延び、SD 2溝跡とSD 3溝跡は屈曲・蛇行している。2溝と3溝は形状等から推察して同一の溝と考えられる。削平のため形状が変化している点はあるが、平面・断面形が不安定で人工物とは考えにくく自然流路と考えられる。堆積土から土師器片・石器片が出土しているが時期は不明である。1溝と4溝は断面が逆台形を呈し、10m前後の確認ではあるが形状も安定しており人工物と考えられる。関連する遺構も見られず性格は明らかではないが、区画施設的なものと考えられる。時期は不明であるが、1溝は住居跡群よりも新しく、4溝は3溝よりも古い。

④ その他

SX 1性格不明遺構＝周辺の遺存状況から判断して底面付近まで削平をうけた住居跡ないし土坑と考えられるものである。遺物から判断して住居跡群と同時期頃ものもと考えられる。

V. ま と め

○検出された遺構には、住居跡・土坑・溝跡・ピットがある。削平等の点があり数的には少ないものであったが、時期は溝跡を除き多くは古墳時代中期のものであった。住居跡群は古墳時代中期のなかでも末頃ものもで、当遺跡における南小泉式期の集落構成を考えるうえでの一資料となりうるものである。尚、今回出土した遺物を観察すると表土層のものも含めて多くのものは南小泉式期のもので他の時期のものがほとんど含まれていない。

○今回の調査区一帯は地形及び土壌に大きな変化は認められなく、調査区西側の状況というものは土取り等のための削平によるものが強いと考えられ、かろうじて東側部のみに遺構が残存していたものと考えられ、本来は広い範囲に遺構群が分布していた可能性もある。尚、昭和53年度の調査（当調査区東側地点・南小泉遠見塚遺跡調査団）では住居跡等の遺構は確認されておらず、古代集落としての分布は他地点に較べて希薄であったことは十分に考えられる。

＜引用・参考文献＞

〔註１〕氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957年 東北史学会

〔註２〕志間泰治 「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第４号 1958年 日本考古学会

〔註３〕古窯跡研究会 「富沢窯跡」1974年

〔註４〕高倉敏明 「山王・高崎遺跡発掘調査概報」1981年 多賀城市教育委員会

土岐山武 「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』1981年 宮城県教育委員会

白鳥・加藤他 「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』1974年 宮城県教育委員会

結城慎一 「南小泉遺跡」1982年 仙台市教育委員会

〔註５〕兼田芳宏 「宮城県仙台市南小泉遺跡」1988年 南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所

〔註６〕小滝利意 「福島県安達郡上高野遺跡発掘調査概報」1972年 大玉村教育委員会

玉川・大越 「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討」『しのぶ考古７』1987年

〔註７〕丹羽 茂 「宮前遺跡」1983年 宮城県教育委員会

〔註８〕佐藤 洋 「南小泉遺跡」1987年 仙台市教育委員会

〔註９〕丹羽・小野寺・阿部 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』1981年 宮城県教育委員会

写　真　図　版

写真１
調査区全景
（東南より）

写真２
Ｃトレンチ基本土層
（東→西）

写真３
ＳＩ１住居跡全景
（西→東）

写真４
ＳＩ１住居跡カマド全景
(西→東)

写真５
ＳＩ１住居跡土器出土
状況（カマド南脇）

写真６
ＳＩ１住居跡カマド
下部状況

写真７
ＳＩ２住居跡全景
（西南より）

写真８
ＳＩ２住居跡遺物
出土状況（南→北）

写真９
ＳＩ２・ＳＩ３住居跡
全景（南→北）

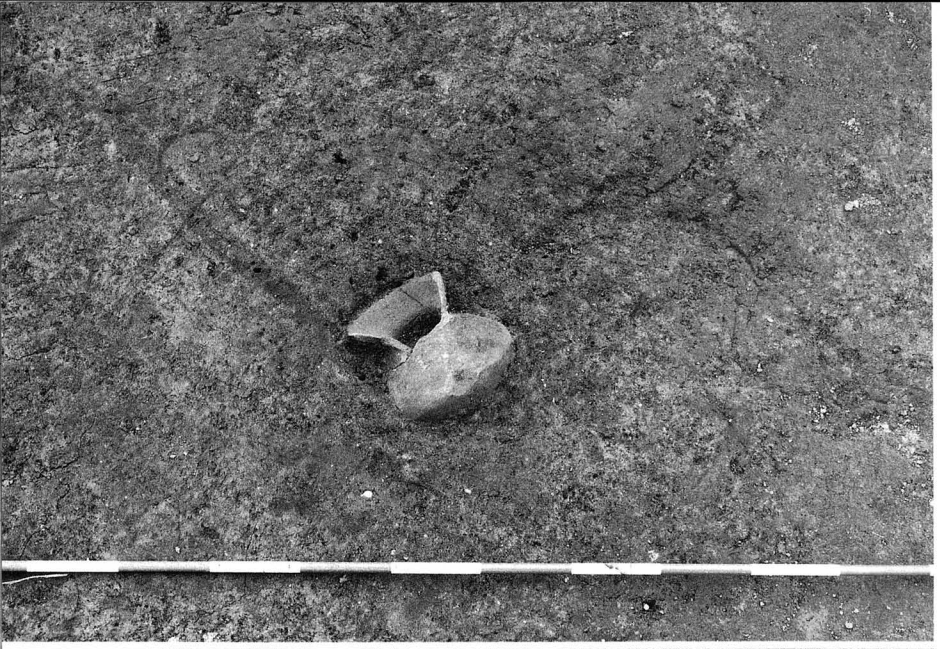


写真10
ＳＩ３住居跡礫出土状況

写真11
ＳＫ１土坑全景
（北西より）

写真12
ＳＫ１土坑断面

写真13
ＳＤ１溝跡全景
（北より）

写真14
ＳＤ１溝跡断面
（南より）

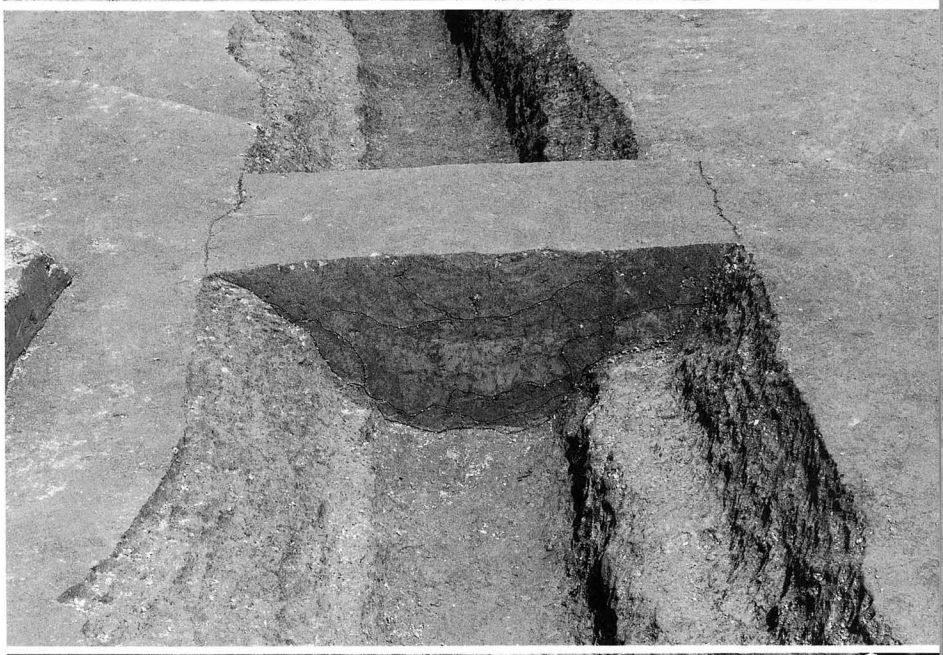


写真15
ＳＤ２溝跡全景
（南西より）

写真16
ＳＤ４溝跡全景
（南東より）

写真17
ＳＤ４溝跡断面
（北より）

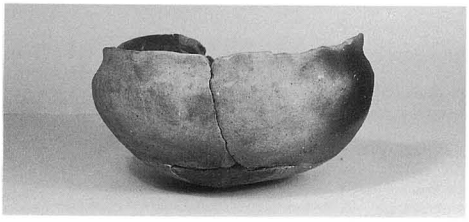
写真18
ＳＤ３・ＳＤ４溝跡
全景（東→西）

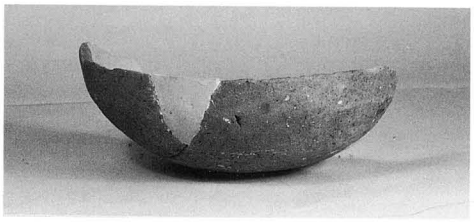
写真19　ＳＩ１住居跡出土遺物

写真20　ＳＩ３住居跡出土土器

1

2

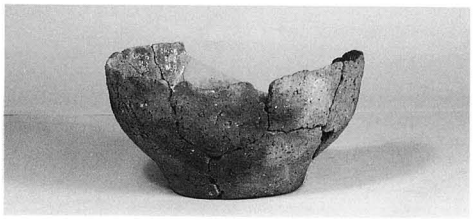

3


4

5

6

7


8

9

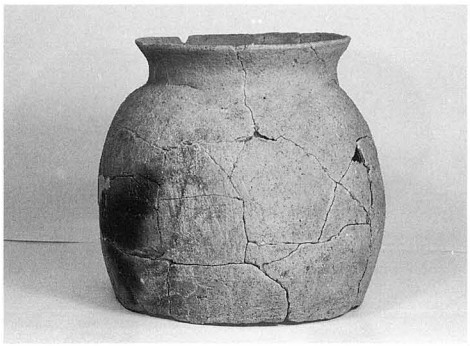
10

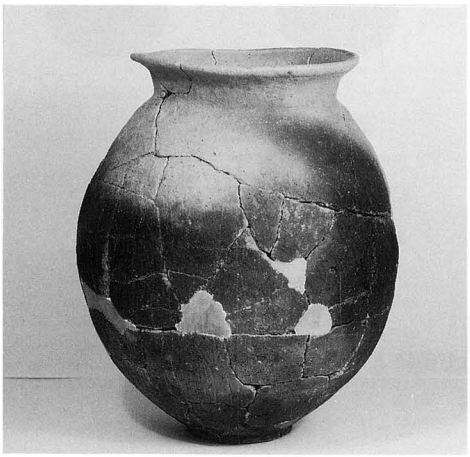
11

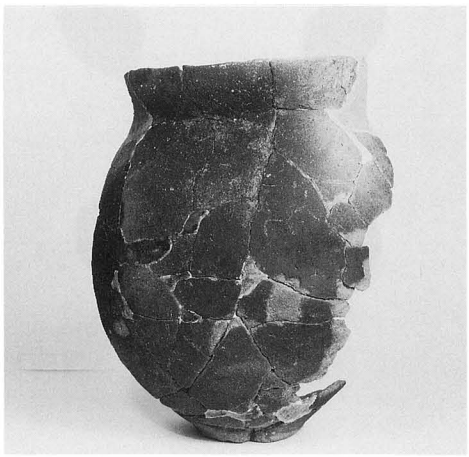
1：図9－2
2：図7－3
3：図7－2
4：図9－4
5：図9－1
6：図9－3
7：図17－1
8：図9－7
9：図9－5
10：図13－2
11：図9－8

写真21　出土遺物1

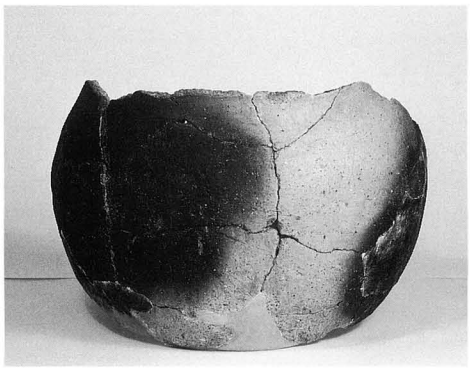
1


2


3


4

5


6

1：図7－6

2：図7－5

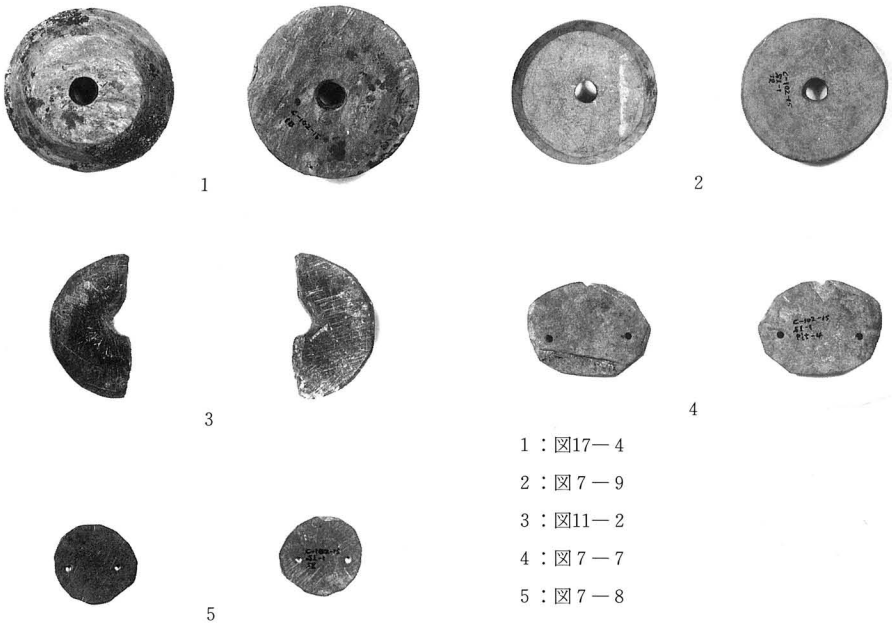
3：図7－4

4：図10－2

5：図10－1

6：図11－1

写真22　出土遺物2



1：図17―4

2：図7―9

3：図11―2

4：図7―7

5：図7―8

写真23　出土遺物3

仙台市文化財調査報告書第131集

南　小　泉　遺　跡

平成元年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24—24　TEL 263—1166